

山の言葉



今回は「山の言葉」です。知っているとともに参考になります。

「あいうえお」順です。

赤布	あかぬの	主に冬道や見通しの悪い樹林帯などでコースを示すため、気の枝などに結びつけられた布やビニールテープなどの目印。
亜高山帯	あこうざんたい	山地帯と高山帯の間に位置する気候帯で、主にシラビソ、コメツカなどの針葉樹林が広がり、高山帯との境界付近にはダケカンバやミヤマハンノキなどの広葉低木林が見られる。
頭	あたま	谷の源頭部に位置する小ピークを指す。〇〇沢の頭〇〇谷の頭などの地名が各地に見られる。
アプローチ		一般的な登山では、交通機関の最終地点から登山口までの工程(主に距離・時間)を示す。
アルバイト		ここで稼ぐのは「お金」ではなく「距離や高度」一般に「山小屋まであと2時間のアルバイト」などというように使われる。
岩小屋	いわごや	かつて猟師やそまびとなどが山中で仮泊するために使った岩窟や洞窟など。石積みなどで補強して手を加えたものは石室と呼ばれる。
右岸	うがん	谷を上流から下流に向かって見たとき、右側を右岸、左側を左岸と呼ぶ。下流から見ると右側が左岸、左側は右岸となる。
浮き石	うきいし	乗るとずれたり、傾いたりする不安定な石。痩せた尾根道や岩場で浮き石に乗りバランスを崩すと非常に危険なので注意したい。
馬の背	うまのせ	馬の背中のように中央部がややくぼんだ形状の尾根はよく馬の背と呼ばれ、各地の山にこの地名が見られる。
雲海	うんかい	ある程度標高の高い山上から見下ろした時、一面に広がる雲を海に見立て雲海と呼ぶ。夏山の早朝や夕刻に見られる。
エスケープルート		悪天候時などに難路を回避したり、安全な場所へ下山する場合いに利用できる道。登山計画の際、あらかじめ確認しておきたい。
エビのしっぽ		岩などに付着しエビのしっぽのような形状に発達する霧氷の一種。風あたりの強い稜線などで良く見られる。樹木に出来る霧氷は樹氷という。
堰堤	えんてい	砂防や洪水対策などの目的で沢に設けられた堤。防災上必要という観点から数多く作られてきたが、自然環境への影響も多い。
オーバーハング		垂直を超えて頭上に覆い被さるような岸壁。ひさしのように大きく張り出した岸壁は屋根あるいはルーフと呼ばれる。
お花畑		多種、多数の高山植物が群生する場所。短い夏に様々な花が一斉に咲き競うことからお花畑と呼ばれる。

U字峡		氷河による氷食地形または壮年期の山地で見られる浸食谷。穏やかなU字形の断面で、明るく開けた溪相が特徴。
カール		氷河の浸食により椀状にえぐられた谷で、ドイツ語でカール、日本語では圏谷と呼ぶ。北海道日高山脈や日本アルプスで見られる。
ガス		山中で発生する霧をガスと呼ぶ。山麓から見れば雲。ガスが濃いと想像以上に濡れ、また道を誤りやすいので注意が必要。
肩	かた	山頂直下に位置する尾根上の平坦地を指す。槍ヶ岳山荘の立つ槍ヶ岳の肩、北岳肩の小屋、谷川岳肩の小屋など地名が各地に見られる。
釜	かま	一般的には水流によってえぐられた丸い淵や深い滝壺を釜と呼ぶ。また蔵王のお釜など、火山の噴火口もその形状から釜と呼ばれる。
鎌尾根	かまおね	鋭い鎌のように両側が切れ落ちたやせ尾根。槍ヶ岳の北鎌尾根、東鎌尾根、西鎌尾根などがその代表。
カヤト	かやと	ススキやスゲなど一部のイネ科の植物を総称してカヤと呼び、山中でカヤが広範囲に茂る場所を「カヤト」と呼ぶ。
ガレ場		大小さまざまな石が散乱するガレ地。不安定な石が多いので、ガレ場の通過には浮き石や落石に十分注意したい。
涸れ沢	かれさわ	通常は水流のない沢で、ある程度の雨量があると流れができる沢のこと。
キックステップ		雪の斜面を登り下りする際の技量で、登りではつま先を、下りではかかとを雪面に蹴りこみ、フラットなステップを作りながら進む。
抛水林	きよすいりん	湿原や草原を流れる川の流れて両岸に帯状に続く林。川によって運ばれた土壌や栄養が養分の乏しい湿原でも樹木を育てている。
切り開き		ササ原や灌木帯などを伐採して拓かれた登山道。定期的な刈り払いが行われていない道はヤブこぎを強いられることもある。
キレット		稜線の一部が急激に切れ落ち込んでいる場所を指し、漢字では「切戸」などが使われる。また富山県側では「窓」と呼ばれる。
草付き	くさつき	草の生えたある程度広い面積の急斜面を一般的に草付きと呼ぶ。登山道となっている場所では滑りやすく、雨天の際などには特に注意が必要。
鎖場	くさりば	急な岩場などの危険個所に、安全確保のために鎖が固定されている場所。鎖に頼りすぎるとかえって危険なこともあり、あくまでバランスを取る補助として利用したい。
クレバス		一般的には氷河上の割れ目を指すが、日本の山の雪渓上の割れ目もクレバスと呼んでいる。
けもの道		山に棲むシカ、イノシシ、クマなどの動物が動き回ることによって自然に出来た踏み跡。登山者の少ない山では紛れ込まないように注意したい。
ケルン		山中で見られる石塚。ガスで巻かれると道を失う危険性のある広い稜線などに、道しるべとして積まれたもの。



圏谷又はカール	けんこく	氷河の浸食により椀状にえぐられた谷で、ドイツ語でカール、日本語で圏谷と呼ぶ。北海道日高山脈や日本アルプスで見られる。
源頭	げんとう	谷の最上流、尾根に到達する場所を源頭という。沢登りでは最後のツメで、ガレ場になっている場合が多く、落石やスリップに注意が必要。
高山植物	こうざんしょくぶつ	高山帯(一般的には亜高山帯も含める)に自生する低木や多年草。氷河期に繁栄した植物が、氷河期の気候に近い高山に移動したと考えられている。
高山帯	こうざんたい	森林限界上部、中部山岳では標高2300~2500mより上部、北海道では標高1500mより上部が高山帯となる。
高層湿原	こうそうしつげん	枯れ死した植物が低温のため腐らず泥炭化して蓄積し、周囲より高くなった湿原。尾瀬ヶ原はその代表的な湿原で、貴重な湿性植物の宝庫となっている。
合目	ごうめ	主に信仰の山で用いられ、登山口から山頂までを10分割したもの。登山口が一合目、山頂が10合目となる。ほかにも諸説はある。
ゴーロ		ゴロゴロと大岩や石が散乱する平坦な河原をゴーロという。
ご来光	ごらいこう	山頂で望む日の出のこと。山岳信仰では日の出やブロッケン現象を阿弥陀仏の来迎に見立てて、御来迎(ごらいごう)ともいう。
コル(鞍部)	コル、あんぶ	コルは英語で、日本語では鞍部のこと。2つのピークの中の低くぼんだ場所を指す。
ゴルジュ		狭く切り立った岸壁に挟まれた谷のことで、日本ではノドや廊下などと呼ばれている。ゴルジュはノドを意味するフランス語。
左岸 右岸	さがん、うが	谷を上流から下流に向かって見たとき、左側を左岸、右側を右岸と呼ぶ。下流から見ると、右が左岸、左が右岸になるので間違えないように。川の流れも同じ。
ザレ		主に小石や土砂などで埋まる崩壊地でザレ場ともいう。また風化した花崗岩の砂地を白ザクと呼ぶ。
三角点	さんかくてん	三角測量を行うときの基準点で、一等から四等までである。見晴らしがよいことが条件になるため、一等三角点の山は展望の山として人気がある。
三地带	さんちたい	亜高山地帯より下部、本州中部ではおおむね標高1500m以下の山地で、ブナやミズナラを代表とする豊かな広葉樹林帯を形づくっている。
三点支持	さんてんしじ	岩場を通過する際の基本技術。両手両足の4点のうち、常に3点で確保しながら移動すること。三点確保ともいう。
栈道	さんどう	岩場や崖など通行困難な場所に木材や鉄板などで柵状に足場を組んだもの。
縦走	じゅうそう	いくつもの山を次々と稜線伝いに続けて歩くこと。山々を結ぶ主稜線上の登山道を縦走路と呼ぶ。

シュカブラ		冬期高山の山稜で雪面に見られる風紋。強風と低温によりクラストした雪面に様々な波状の紋様が出る。
森林限界	しんりんげんかい	高木が育成できなくなる限界の地点。これより上部が高山帯となる。
スタンス		一般的な登山では岩場での足場、足がかりを指すが、岩登りでは登降の際の足の構え方を指し、足がかりはフットホールドと呼ぶ。
スノーブリッジ		谷筋を埋めていた残雪が解け、兩岸にまたがる橋のようにアーチ状に残った雪渓
スプーンカット		雪渓上に良く見られるスプーンですくい取ったような紋様で、表面に積った土砂などの影響で溶け方にむらが出るために生じるといわれている。
スラブ		表面に凹凸がほとんどない滑らかな一枚岩をスラブと呼ぶ。岩登りでは非常に難しいルートとなる。
瀬	せ	川の流れの中で水深が浅く、渡渉が可能となる地点。ただし、流れは急になる。
雪渓	せっけい	谷筋を埋めていた雪で、夏まで解けずに残っているものを雪渓と呼ぶ。登山ルートとなる雪渓ではスリップだけでなく、音のしない落石にも十分注意したい。雪の上を走る落石は音が出ないこともある。
雪田	せつでん	高山の稜線付近に夏まで残る残雪を雪田と呼ぶ。稜線上の山小屋には貴重な水源となっている。
雪庇	せっぴ	稜線上の積雪が風下側に庇状(ひさしじょう)に張り出したもの。冬の北アルプスでは強烈な季節風の影響で、稜線の東面に巨大な雪庇が形成される。
双耳峰	そうじほう	2つの顕著なピークを持つ山をいう。鹿島槍ヶ岳、谷川岳、筑波山などがその好例
巻道	まきみち	頂上の周りがある登山道。(ピークを巻く)といった表現をする。良い巻道か調べておくことも大切だ。
ヤセ尾根		両側が急な斜面で、幅のせまい尾根をヤセ尾根といいます。ヤセ尾根では足元に充分注意をして歩くと共に、登山者同志が交差出来ない道幅での場所では前方からくる登山者がいないかどうか確認してから進みましょう。
徒渉	としょう	沢に橋がなく、飛び石つたいや水流に踏み込んで渡ること。沢の水は思った以上に力が強く、水流に踏み込んで徒渉できるのは靴に水がかかる程度、足首以上の深さになると危険です。特に雨天後など沢が増水しているときは充分な注意が必要です。
取り付き		登山口からしばらく平坦な道を歩き、尾根伝いの本格的な登りが始まる地点で「尾根に取り付き」と表現し、その地点を取り付き(点)と呼んでいる。また「岩場に取り付き」、「雪渓の取り付き」、など尾根以外の地形に対しても使う。
出会	であい	沢の支流が本流(谷)に注ぐ地点が出会。沢だけでなく、登山道が交わる地点や、登山道から林道に出る地点などでも使う。
徒渉	としょう	沢に橋がなく、飛び石つたいや水流に踏み込んで渡ること。沢の水は思った以上に力が強く、水流に踏み込んで徒渉できるのは靴に水がかかる程度、足首以上の深さになると危険です。特に雨天後など沢が増水しているときは充分な注意が必要です。
ダワ		稜線でピークとピークの間の尾根。峠もダワ。大きな峠は「大ダワ」またタオとも言う。